

令和 5 年 5 月 31 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02490

研究課題名（和文）エリザベス朝王朝交替期における諷刺的文化環境の出現と演劇興行へのインパクト

研究課題名（英文）A Study of Satirical Culture and its Impact on Theater in the Late 1590s and the Early 1600s

研究代表者

佐野 隆弥（Sano, Takaya）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：90196296

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：研究期間の全体を通じて、王朝交替期に台頭した諷刺文化の実態と動態を詳細に分析し、それらが演劇に与えた影響について調査を行い、該当時期の演劇史の見直しを行った。具体的には、諷刺文化の影響が最も顕現化した「詩人戦争」に関連するMarston、Jonson、Dekker等の「詩人戦争」における役割と実際を時系列にたどり直し、これら劇作家の諷刺劇の分析と戯曲同士の影響関係を洗い直すことによって、諷刺文化の様態を鮮明に記述した。さらに、諷刺文化の様々な要素が流入していると考えられるパルナッソス3部作を分析し、この戯曲が同時代の諷刺文化を客観的に総括したものであることを立証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の第1の学術的意義は、シェイクスピアを中心とした民衆演劇の付随的存在として軽視される傾向にあった少年劇団が、実際には独自のプレゼンスを持つ存在であり、その独自性を同時代の演劇文化発展史の歴史的な文脈において、実証的に跡づけたことにある。さらに、本研究の第2の意義は、Marston、Jonson、Dekkerならびに大学劇のテキストの精査、およびその宗教的・文化的振る舞いの調査、とりわけ、諷刺文化や諷刺劇の検証を通して、彼等の戯曲創作が、いかに同時代の言説や環境と切り結んでいたかを検証したことであり、演劇文化の展開に彼等が何を果たしたのかを動態的に記述したことである。

研究成果の概要（英文）：Throughout the entire research period, the actual situation and dynamics of the satirical culture that emerged in the early 17th century were analyzed in detail, their impact on theater was investigated, and the history of theater during the relevant period was reviewed. Specifically, we have traced chronologically the roles of Marston, Jonson, Dekker, and others in the “Poets’ War,” in which the influence of the satirical culture became most apparent, and have clearly described the state of the satirical culture by analyzing the satirical plays of these playwrights and reviewing the influence of their plays on each other. Furthermore, by analyzing the Parnassus trilogy, which is thought to contain various elements of the satirical culture, we have proved that the plays are an objective summary of the satirical culture of the period.

研究分野：初期近代演劇

キーワード：エリザベス朝王朝交替期 諷刺文化 詩人戦争 John Marston Ben Jonson Thomas Dekker パルナッソス3部作 大学演劇

1. 研究開始当初の背景

エリザベス朝演劇文化の立ち上げや構築に関する研究は、古くから行われてきた。特に 20 世紀の E. K. Chambers (1923) や G. Wickham (1959-81)、G. E. Bentley (1971, 1984) といった先学たちの研究は優れたものである。また、少年劇団史に関する分析も Chambers や Hillebrand (1964) の手でなされてきた。我が国でも玉泉八州男氏の先駆的な研究が存在し (1997, 2004)、申請者もこれまで、平成 20～22 年度及び平成 23～25 年度の 2 度の基盤研究(C) のプロジェクトを中心に、エリザベス朝演劇文化の起業について研究を続けてきた。それらの成果に基づき、平成 26～28 年度の基盤研究(C) では、少年劇団の興行活動を中心に、1570～80 年代における宮廷政治文化と演劇興行の起業に関する相互作用の研究を遂行した。本研究の課題である、王朝交替期における諷刺的文化の出現と演劇興行への影響に関する研究は、従前からの研究成果を踏まえた上で、分析対象を少年劇団の活動再開という現象に特化した、発展的研究である。

エリザベス朝王朝交替期のイングランドでは、政権末期の政治状況と市民文化の成熟とを通して、諷刺的文化環境が出現しつつあった。こうした機運の結節点にいたのが演劇興行であったが、その諷刺的環境を最も顕在的な形で体現したのが、1590 年頃活動停止した後この時期に再活動した複数の少年劇団であった。これらの少年劇団は、劇作家を主体に劇団・劇場をも巻き込みながら、いわゆる「詩人戦争」と呼称される事象を展開したが、その実態は未解明の部分も多く、特に少年劇団の活動再開との関係については不分明の点が多く残っており、エリザベス朝演劇文化研究者の理解も十分とは言えない。

本研究は、先行研究を包括的に再検討した上で、当該時期の少年劇団の活動再開と関係の深い John Marston、Ben Jonson、Thomas Dekker の 3 名、および詩人戦争全体に関わる事象に取材した大学劇を軸に、この 21 世紀において、適切なエリザベス朝文化史の構築をめざした。従来の文化史研究の中には、特定の事象への偏りや断片的な分析も散見されるが、本研究では、実証的に構築されたエリザベス朝文化史を通しての、諷刺文化と演劇興行の動態解明を行った。

2. 研究の目的

本研究は、エリザベス朝王朝交替期において顕著となった諷刺的文化環境が、演劇興行に及ぼした作用に関する研究であり、取り分け少年劇団の活動再開という現象が有する、演劇興行の実態を反映する機能に注目した。その上で、1590 年代末期から 1600 年代初頭のイングランドにおける、演劇文化が変質する様を、諷刺的文化環境の出現を念頭に置きながら、実証的に再構成し、記述した。取り分け、演劇文化の変化を如実に映し出す少年劇団の活動再開とそれに関連する劇作家に注目し、彼等の政治・文化的位置と、演劇興行の変容に及ぼした影響を探り、併せて、Marston、Jonson、Dekker の戯曲及び大学劇を検証しテクストの特質を明らかにした。

3. 研究の方法

本研究では、エリザベス朝演劇文化の展開に作用した、諷刺的文化環境と少年劇団の再活動との影響関係を動態面から分析するため、以下の 4 つの項目を設定した上で考察した。

(1) John Marston は、ミドル・テンブル法学院在籍中の 1598 年、2 つの諷刺詩を偽名出版することで文筆家としてのキャリアをスタートさせた。その後 1599 年頃から劇作に着手し、複数の劇団に戯曲の提供を開始している。そしてその 1 つが活動を再開させた直後の聖ポール少年劇団であり、*Histrionmastix* (1599) や *Jack Drum's Entertainment* (1600) などの諷刺喜劇が上演されたが、それらの戯曲における Jonson の描写が、詩人戦争を勃発させたものと考えられている。

Marston の諷刺詩人から諷刺劇作家への転身と聖ポール少年劇団の再始動とは、偶然の時機的一致の側面が強いが、それぞれの事象の背後に存在する動機や理由、またそれらを準備させた文化的・社会的環境の分析は、Reavley Gair の業績 (1982 他) 等にもかかわらず十分には明らかにされていない。本論文では、少年劇団の活動再開というエリザベス朝演劇史の上での重大事象を明らかにするために、上記 2 作品を中心に、Marston の演劇界への参入の検証と並行して、長期間停止状態にあった少年劇団が、なぜこの時期に再活動を果たすことが可能となったのかに関して、国教会の宗教政策を踏まえた政治的なアスペクトから実証的に解明した。

(2) Marston による諷刺的中傷に反応して、Ben Jonson は自ら「諷刺喜劇」と呼称する 2 本の戯曲 *Cynthia's Revels* と *Poetaster* で応戦し、詩人戦争が開始される。そしてこれらの作品を上演したのが、再開間もない王室礼拝堂少年劇団であった。詩人戦争という名称自体は誤解を招きやすいものであるが、この一連の展開は、(1) それまで成人劇団に拠っていた Jonson が、聖ポール少年劇団のライヴァルである王室礼拝堂少年劇団を拠点として利用したこと、(2)

諷刺文化の本流を劇作家間で争奪したこと、(3)個人の中傷合戦が演劇興行全体の諷刺的風潮を生成したこと、の3点において、興味深い現象と考えられる。

Jonsonの「諷刺喜劇」は、先行研究において少年俳優の演技が生み出す諷刺効果やセクシュアリティの面から議論されてはきたが、劇団と戯曲の関わりについては目新しい知見を提示することに成功していない。本研究では、王室礼拝堂少年劇団の活動再開を可能ならしめた条件を実証的に調査した上で、Jonsonがそこにいかにアクセスしたかを検証し、さらに劇作家間の詩人戦争が、Jonsonのキャリア及び彼を取り巻く演劇環境に与えた影響に関して解明を進めた。

(3) MarstonとJonsonの間で開始された詩人戦争は、Jonsonが*Poetaster*の中でThomas Dekkerをも揶揄したことで新たな局面を迎える。DekkerはおそらくMarstonの助力を得ながら、同年中に*Satiromastix*を執筆上演し、劇中でJonsonを諷刺することで反撃に打って出る。Dekkerの戯曲は元々成人劇団によって上演されており、*Satiromastix*は成人劇団のみならず聖ポール少年劇団でも上演されることになったため、ここに成人劇団と2つの少年劇団を巻き込んだ興行上の対立構図が成立することになる。

Jonsonが*Poetaster*の中でDekkerを攻撃した理由は、Dekkerが多くの劇作家と共作を重ねていた点であったが、ここには、劇作家という職業の権威化を図ろうとするJonsonと、共作という劇作家間のネットワークを通して演劇界での生存を確保しようとするDekkerとの、戦略の相違が透けて見える。実際Dekkerは、詩人戦争の長期化を通して、観客の関心を掻き立てることも視野に入れていた。本研究では、先行研究のほとんどが手付かずの状態に放置してきたDekkerの生存戦略を、Jonsonへの対抗軸を中心に、*Satiromastix*の諷刺性の検証を通して解明した。

(4) The Parnassus plays 3部作は、世紀転換期のケンブリッジ大学とロンドンを背景に、2人の大学生の人文主義教育の修了と生業への困難な道程を描写する喜劇であり、特に第2部*The Return from Parnassus*は、演劇業界への参入を画策する主人公たちの振る舞いが活写されていて、従来より同時代の演劇興行の実態を覗き見る資料として研究者たちの関心を引いてきた。

演劇界へ劇作家を供給する母体としての大学と劇作家業という苦界とを、諷刺的な視点から揶揄する本劇3部作は、同時期に発生した詩人戦争における劇作家間の多面的な葛藤をも取り込んで、王朝交替期の社会と文化及び文筆家の経済的立ち位置を記述するものである。本研究では先行研究を補いつつ、世紀転換期の諷刺的文化環境と演劇創作の現場とを総合的に映し出すものとして本3部作を捉え、成人劇団とも少年劇団とも異なる第3のチャンネルとしての大学劇の意味を解明した。

4. 研究成果

2017年度～2022年度の6年間（延長期間2年を含む）に4件の原著論文を刊行し、6件の口頭発表を行った。また図書を1件出版した。研究成果の概要を以下に述べる。

(1) 原著論文（すべて単著）

「少年劇団の活動再開とJohn Marston 法学院劇としての*Histrionastix*」(2018年)

本論文は、初期近代イングランド演劇史において、「詩人戦争」を惹起するきっかけとなった戯曲と考えられている*Histrionastix*を分析対象として取り上げ、戯曲本体の検証と、作劇上演環境を調査し、*Histrionastix*・1599年のMarston・セント・ポール少年劇団の3者の関わりを分析したものである。結論として、以下の4点を明らかにした：(a) セント・ポール少年劇団は、人事体制を一新することで活動再開を視野に入れた対応を進めていた；(b) セント・ポール少年劇団は再活動を急いでいたが、その証拠と考えてよいインターロッド風の演目を準備していた；(c) 同時期の法学院の余興においても、*Histrionastix*という同系統の戯曲が上演された；(d) 戯曲制作へ転身を図ろうとしていたMarstonは、このような情報を考慮しながら、複数のルートと接触を試みていた。

「Ben Jonsonとチャペル・ロイヤル少年劇団 *Every Man Out of His Humour* 創作上演時期を中心として」(2019年)

本論文は、本課題の第2ステップとして、*Histrionastix*によって触発されたと考えられているBen Jonsonの反応に着目し、チャペル・ロイヤル少年劇団の活動再開を視野に入れたJonsonの動向や環境を、特に自作の上演劇団選択を中心に議論したものである。議論の構成は以下の通りである：(a) *Histrionastix*とJonsonの関わり；(b) *Every Man Out of His Humour*の構造分析と3幕1場の特異性の指摘；(c) Jonsonの掲げるポエティクスとJonsonの演劇産業に対する姿勢；(d) Jonsonの初期キャリアにおける演劇の位置づけ；(e) Jonsonを取り巻く政治経済環境とパトロン獲得による生計戦略；(f) Jonsonとチャペル・ロイヤル少年劇団との相互接近と収益の確保。以上の議論を踏まえた上で、この時期のJonsonの活動にとり、諷刺文化の拠点であった法学院の存在が非常に重要であったことを明らかにした。

“Boy Companies in 1601: Thomas Dekker’s *Satiromastix* and their Fortunes” (2020年)

本論文は、本課題の第3ステップとして、Thomas Dekker の *Satiromastix* に注目し、本劇が宮内大臣一座とセント・ポール少年劇団の手で上演されたことを視野に入れた上で、その上演にまつわる実態を調査し、1600年から1602年にかけての2つの少年劇団の動向を検証・記述したものである。議論の構成は以下の通りである：(a) *Every Man Out of His Humour* 後の「詩人戦争」の展開の確認；(b) 「詩人戦争」への Dekker 参戦の動因 劇団からの戯曲制作のオファー；(c) Dekker とセント・ポール少年劇団との接点 Marston の関与の有無；(d) 1601年の少年劇団 岐路に立つマネジメント。以上の議論を踏まえた上で、セント・ポール少年劇団の活動再開と、それをにらんだ上でのチャペル・ロイヤル少年劇団の再活動、さらには興行企業家 Henry Evans によるチャペル・ロイヤル少年劇団のてこ入れの実際を明らかにした。

「Thomas Dekker in 1611: *The Roaring Girl* における時代性と演劇的意識」(2020年)

本論文は、の継続研究として、1611年の時点における Dekker の演劇活動の実態を分析したものである。その理由は、この年が Dekker のキャリアにおける重要な転換点もしくは結節点として考えることができるからである。Dekker は、1606年に *The Whore of Babylon* を創作後、4年間ほどパンフレットの制作に集中、その後に *The Roaring Girl* を執筆するが、1612(13)年から負債者監獄に8年間入獄というブランクがあったため、本劇は Dekker の劇作家としての経歴の中で重要な作品と考えることができる。結論として、*The Roaring Girl* という戯曲が、同時代のロンドンを喚起する市民劇的なフレームワークを使用する一方で、同時期に舞台にかけられた複数の戯曲に言及することを通して、Dekker は戯曲のクラスターの相互参照による意味空間を生成しようとしていることを明らかにした。

(2) 口頭発表(すべて単独)

「法学院劇としての *Histriomastix* John Marston の劇作家転身をめぐって」(2017年9月)

「少年劇団の活動再開と John Marston *Histriomastix* 制作をめぐって」(2017年9月)

原著論文「少年劇団の活動再開と John Marston 法学院劇としての *Histriomastix*」(2018年)に同じ。

「Thomas Dekker in 1611 *The Roaring Girl* における時代性と演劇的意識」(2017年10月)

原著論文「Thomas Dekker in 1611: *The Roaring Girl* における時代性と演劇的意識」(2020年)に同じ。

「Ben Jonson の初期気質喜劇における自己実現 *Every Man Out of His Humour* 創作上演時期を中心とした劇団の選択」(2018年6月)

「Ben Jonson と少年劇団 *Every Man Out of His Humour* 創作上演時期を中心として」(2018年10月)

原著論文「Ben Jonson とチャペル・ロイヤル少年劇団 *Every Man Out of His Humour* 創作上演時期を中心として」(2019年)に同じ。

「1601年の少年劇団 Thomas Dekker’s *Satiromastix* を中心に」(2019年6月)

原著論文 “Boy Companies in 1601: Thomas Dekker’s *Satiromastix* and their Fortunes” (2020年)に同じ。

(3) 図書(単著)

「シェイクスピアを諷刺する パルナッソス劇と世紀転換期の諷刺文化」(2021年)

本論文は、1599年から1602年にかけて、ケンブリッジ大学セント・ジョンズ学寮で上演されたパルナッソス三部作 取り分け、『パルナッソスからの帰還・第二部』を対象に、その諷刺のありようの分析と、世紀転換期の諷刺文化の検証とを通して、本劇を演劇史的に位置づけたものである。議論の構成は以下の通りである：(a) パルナッソス三部作の概要および『パルナッソスからの帰還・第二部』第4幕第3場における宮内大臣一座オーディションの場；(b) Ben Jonson に対する諷刺と彼の応答；(c) 諷刺詩人から劇作家への John Marston の転身；(d) 17世紀初頭における諷刺文化の展開。以上の議論を踏まえた上で、パルナッソス劇は同時代の諷刺的要素を取り込みそれらを総括しながら、次に続く時期の諷刺へと橋渡しをする作品であると評価することができることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 佐野隆弥	4. 巻 78
2. 論文標題 Thomas Dekker in 1611: The Roaring Girlにおける時代性と演劇的意識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野隆弥 (SANO Takaya)	4. 巻 77
2. 論文標題 Boy Companies in 1601: Thomas Dekker 's Satiromastix and their Fortunes	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野隆弥	4. 巻 75
2. 論文標題 Ben Jonsonとチャペル・ロイヤル少年劇団 Every Man Out of His Humour創作上演時期を中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 47-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐野隆弥	4. 巻 73
2. 論文標題 少年劇団の活動再開とJohn Marston 法学院劇としてのHistriomastix	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐野隆弥
2. 発表標題 1601年の少年劇団 Thomas Dekker 's Satiromastixを中心に
3. 学会等名 エリザベス朝研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野隆弥
2. 発表標題 Ben Jonsonの初期気質喜劇における自己実現 Every Man Out of His Humour創作上演時期を中心とした劇団の選択
3. 学会等名 エリザベス朝研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐野隆弥
2. 発表標題 Ben Jonsonと少年劇団 Every Man Out of His Humour 創作上演時期を中心として
3. 学会等名 シェイクスピア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 佐野隆弥
2. 発表標題 法学院劇としてのHistriomastix John Marstonの劇作家転身をめぐって
3. 学会等名 エリザベス朝研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐野隆弥
2. 発表標題 Thomas Dekker in 1611 The Roaring Girlにおける時代性と演劇的意識
3. 学会等名 シェイクスピア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 佐野隆弥
2. 発表標題 少年劇団の活動再開とJohn Marston Histriomastix制作をめぐって
3. 学会等名 関西シェイクスピア研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐野隆弥ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 245
3. 書名 シェイクスピアとの往還ー日本シェイクスピア協会創立六〇周年記念論集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------